今日は！ Alô, como vai アロ コモ ヴァイ

しまう。

戦前のルーマニアの豊かな生活を思い出しているルーマニア人は、一九三八年からの国王の独裁、そしてその後に続く共産党の独裁を忘れたいと思っている。しかし、そのためには、政治的な革命だけでは足りないと思う。考え方の革命も要る。前の共産主義の社会では、「政府が個人の代わりに考える」という表現があった。その意味は、一人一人が自由ではなかったし、自由の代わりに基本的な必要物（仕事や教育や医療など）が政府によって整えられていたということである。そんな考え方の結果として、今の社会ではいろいろな問題が起こってきた。大勢の人々に、自由ということは重荷になってしまうのだろう。だから、ほかの事より早く、我々の考え方に変化が必要だろう。新しい社会のための新しい人間関係をつくらなければならない。みんなの努力、協力、お互いの理解と尊厳がなければ成功は無理である。

ルーマニア人は日本の経済的な成功に感服している。しかし、そのような成功への道を歩むため、最初は全ての国民が広島の教訓を理解しなければならないと思う。

日本の国際化

―本当に進んでいるのだろうか……―

工学研究科博士課程前期移動現象工学専攻二年
ポルト・ジェファーソン

私は日本人と結婚したブラジル人です。ブラジルのような多民族社会においては、国際結婚はふつうのことですが、日本ではまだ少し「メズラシイ」ことのようです。日本の国際化につれて、国際結婚は次第にふつうのことになるだろうと私は考えます。

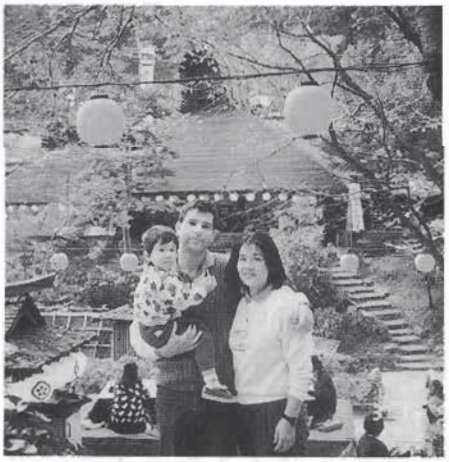
四度目の日本

私は四年半前、ブラジルの私の会社の仕事で初めて日本にやってきました。私達はブラジル北部に新しい化学プラントを建設しようとしており、技術供与者として三菱化成が選ばれていました。私は、三菱からの技術移転を任された化学技術者のグループの一員でした。

最初、私は他の二人のブラジル人技術者とともに、美しい倉敷の街で三ヶ月ホテル住まいをしました。そして日本に着いて二週間もしないうちに、今は私の妻となることとなった優子という名前の女性と出会いました。

私はまたそれから二度ほど日本にやってきて、そのうちブラジルに優子をつれて帰りました。しかし、二年半ほど前、私達のプロジェクトは、ブラジルの経済の問題のために延期されました。私はこれを以前から暖めていた計画を実行に移すよい機会と考えました。それはもう一度勉強をすることです。私の妻は日本人であり、そして彼女の両親は福山市に住んでいるので、私は広島大学に来ることに決めました。幸い、私を受け入れてくれることに同意してくれた親切な先生にめぐりあうことができ、現在私は移動現象工学専攻の博士課程前期二年に入ったところです。

一九六五年、ブラジル生まれ。一九八六年、リオ・グランデ大学工学部化学工学科卒業。ブラジルでの化学会社勤務を経て一九九一年広島大学工学部研究生、一九九二年、博士課程前期入学。化学熱力学研究室に在籍。



私の家族（岩国郊外のレストランで）

ブラジル

多民族国家ーブラジル（ブラジルの私のアパートの住人）

ブラジルは大きく、そして若い国です（ポルトガルから独立して百七十年しかたっていません）。地震、火山、台風、戦争、あるいは「民族の浄化」のような経験は全く経ていません。気候は一般に温和で、豊富な天然資源に恵まれています。しかし、七十年代中頃から、高インフレ、外国からの莫大な借金など、深刻な経済問題を抱えています。これらは、極めて大きい収入の格差と現在の政府の施策不足によりここまで悪化させられたものといえます。

二十年ほど前までは、ブラジルは経済の急成長により「未来の国家」と見られていました。そして「インディオーポルトガル人ーアフリカ人」の混血の他に、ヨーロッパや日本の移民のように、どのような文化圏の外国人をも受け入れてきました。

しかし最近では、経済的困難のために、人の流れは逆になりつつあります。ブラジル人の中には、経済のより安定した国でのより快適な暮らしを探し始めている人もいます。

ブラジル、日本、そして外国人

日本の人々は、自分の国を文化的に単一なものとみるのを好むようです。ブラジル人はそれにくらべ、概して自分の国が多文化的であることを誇らしく思っており、異なる人種間あるいは文化間での人々の結婚が概ね広く受け入れられています。例えば私の場合、母はポーランド人の家系で、一方父はドイツ人、ポルトガル人、アフリカ人、インディオの混血です。日本人と結婚したことにより、私の子供には日本人という血が加わり、もっと混血度が増しました。

ブラジルのような多民族の社会においては、外国人を嫌うのは難しいことです。まず第一に、そこでは、先住インディオのような例外を除いては、誰が誰より、より外国人だと決めることが難しいのです。日本で私が学校に招かれてブラジルのことを話しにいくと、子供たちは本当の「ガイジン」を見て、その結果私のこともまた人間であることを理解するわけです。ブラジルでは子供たちは外国人には何の興味も示しません。彼らにとって何ら特別なものではないからです。

日本の「国際化」

日本の人々は、世界が狭くなりつつあることを理解しています。孤立することに未来はありません。日本は何世紀にもわたって孤立した存在でしたが、門戸を世界に開放することで富と新しいエネルギーを手に入れました。私は、「国際化する」ための日本人の努力それ自体は、誠実で正しいものだと考えています。

一方で、ときにそれはうわべだけのものになります。私の住んでいる西条という街は、自らを「国際都市」と称するのを好むようです。しかしいざアパートを借りようとすると、外国人であるというだけで私はたくさんの問題を抱えることになりました。私の妻は日本人だというのに！そして私の招かれた「国際的な」催しのいくつかでは、明らかに二つのグループが存在しました。日本語で話し合っている日本人のグループと、英語で話し合っている外国人のグループです。

しかし私は、以上のようなことはしかたがないことであり、日本はたとえゆっくりであっても、確実に国際的になりつつあると思います。私は日本のこの状況を好ましいことと思っており、微力ながらこの国際化の過程のお役に立ちたいと思っています。